

「仏教」から臓器移植を考える(下)



無前提の慈悲心

横山 紘一

よこやま・こういつ

1940年、福岡県生まれ。70年、東京大学大学院印度哲学科修了。80年、第15回日本宗教学会賞受賞。現在、立教大学教授。著書に『唯識の哲学』、『唯識とは何か』など。

(三)「仏教」はどのような願いをもつて生きよというのか

前号において、無前提の意志・願いを加味して結論を出すことができたと述べたが、この無前提の誓願の現れが、あの「捨身飼虎」にみられる釈尊の慈悲行である。

この願いをあえて「無前提」と形容したのは、それが、なぜそのような願いを持つのかとその理由を問うことができない、いわば先天的・生得的な願いであり、心の底から湧き出てくる気持ちであるからである。

以前に爆発的な人気を博した『魔女の宅急便』というアニメ映画があった。一人の子供の魔女が箒に乗って修行の旅に出されるのであるが、たまたま縁あって住み着いた町で、宅急便のアルバイトをしながら多くの人々との触れ合いのなかでさまざまな体験をし、成長していくという筋書きである。私もこのアニメをビデオで幾度か見たが、その都度涙を流した。なぜこの映画は涙を流すほどに感動的なのか。それはこの映画の中でつねに「美しい人間の心」が描かれているからである。最後に、気球に乗って遭難しそうになった男の子を助けようとして、主人公の魔女は懸命に箒を操って頑張り、そしてとうとう救出に成功する。その瞬間それを見守っていた町の人々が一斉に拍手を送る。まさに感動的なシーンである。

美しい人間の心——それは苦しむ他人を見て心の底からその人を救ってあげたいという心である。ここであえて「心の底から」ということを強調したい。

本年初頭の阪神大震災に際して多くの若者たちが自発的にボランティア活動に駆けつけた。日頃忘れていた深い美しい心が大惨事をきっかけに心の底から噴き出してきたからであろう。

私は最近、臓器移植という事柄が展開されてきた原動力はそもそも一体何なのか、という根源的な問いを深く考えるようになった。そしてその原動力として、一つは「ドロドロした人間のエゴ心」と、もう一つは「美しい人類愛」という両極端の二つの力を考えてみた。これはあくまで頭のなかで考えたもので、実際はこの両者の複雑な絡み合いのなかで臓器移植が展開されてきたのであり、またこれから推進されて行くことであろう。とにかくエゴ心の複雑に絡み合った人間世界のこと、臓器移植の原動力を一つに求めることは不可能である。

しかしこれまではたとえそうであったとしても、これからの臓器移植問題を考えるにあたり、それでは不十分であると思う。まずは一人一人がこれまでの情報(伝統、風習、心情、仏教あるいはキリスト教など宗教の教理、信念なども含む)をひとまず一切かなぐり捨てて、そして自分の心の奥底に

「己とは他者とは一体なものか」「いのちとは臓器とはそもそもなにか」「苦しむ人にどのように対処したいのか、すべきなのか」と自ら真剣に問いかけてみる必要があると思う。

これこそが情報過多に生きる現代人の、そして安易にイデオロギーに固執して本来の生き方を見失ってしまう人間の急務であると思う。

そしてそのように真剣に問いただす人は、かならず自分の心の底に、あの『魔女の宅急便』に描かれている「美しい心」「心底から他者の幸福を願う気持ち」があることを発見するものと確信している。そして日本人のなかで自分の「美しい心」を確認する人が増えれば増えるほど臓器移植に対する日本人の、日本社会の考え方も変わってくるものと信じる。

(四)「仏教」からみて臓器移植は是か非か

この小論を終わるにあたって、「仏教」からみて臓器移植は是か非かを結論づけてみよう。その際にも、すでにことわったように「seinからsollenへ、そしてその中間にwollenを介入させる」という私なりの思考方法に基づくことにする。

(1) sein: なにか

「仏教」の根本思想は「諸法無我」である。すなわち「あらゆる存在には我がない」と主張する。したがって「私」も「他人」も、「私の臓器」も「他人の臓器」も本来的には存在しないのである。

(2) wollen: なにを願うのか

「仏教」は人間の二大尊厳性として知恵と慈悲を説く。このうち慈悲とは、「一切の生きとし生けるものを救いたい」という、心の奥底から湧き出る、いわば無前提の意志・願いである。このような慈悲心はホモ・サピエンスであるかぎり、すべての人間の中にあるものと私は確信し、同時に私自身の中にそれを強く感じる。

(3) sollen: いかに生きるか

以上のseinとwollenとを前提とすると、「仏教」は、そして私は、臓器移植に対して、「是」であると結論する。

※

以上私はかなり単純な論法で臓器移植を是と認めた。それは、私の中にあるあの「無前提の意志・願い」としての慈悲心がそうさせたのである(脳死には強く反対したが、臓器移植に関しては、それを菩薩行として認めた『臨時脳死及び臓器移植調査会』の委員の一人、梅原猛氏の心情の奥にもこの無前提の意志・願いがあるものと私は信じる)。

ところでこの単純論法に対して仏教界の多くの方々が反対されるであろう。なぜなら、今の日本仏教は、日本固有の伝統や文化と混合して、私が捉える「仏教」と大きく相違しているからである。そのような現れとして、たとえば土着信仰である先祖供養と結びついて、お盆には祖先の霊を迎えるという行事を、さらには臓器移植との関係でいえば、もしも角膜など臓器を他人に与えると「三途の川」を渡ることができず、往生することができないという信仰などをあげることができる。

また、「遺体を傷つけることは可愛そうだ。とくに肉親の遺体についてはなおさらである」「他人の死を前提として生き延びようとするのは患者の行き過ぎた欲望である。与えられた運命的な死を素直に受容すべきである」「生きているということと同時に、死んでいるということもそれに劣らず大切なことである」などの日本人の心情も日本固有の仏教からの影響があるのかもしれない。

とはいえ、このような心情をもつ人でも、あの釈尊の菩提樹下での「全・無我」の悟りの世界に思いをはせ(できれば自ら立ち返り)、「私の」「あなたの」「他人の」という自己を中心とした自他区別の心を押さえ、より広い心で、より柔らかい心で、よりエゴ心のない美しい心で、この臓器移植という問題を見直してみようではないか。

「生かされているのだという感謝の心」と「他の人々の幸福を願う美しい心」とを十全に働かせて、人のため、世のために生き生きと生きようではないか。

この二つの心が世界に満ち溢れることを願ってこの小論の筆を置く。